

## 『青森県史 資料編 近現代7 青森論』

ネイスン・ホブソン

正直に告白すれば「県史」のイメージは、どこか形式ばった、無味なものであった。しかし本巻は、そのイメージを払拭するだけの迫力がある。明治期から戦後期までの雑誌や新聞記事を大量に掲載した労作であるが、その魅力は青森にまつわる多種多様な論考・言説（青森論）を生きた生きたと伝えてくれるところにある。

同書は以下の構成からなっている。

総説 「青森論」のために

第1章 「開化」する地域メディア―明治前期―

第2章 「東」と「北」への志向―明治後期―

第3章 展開する自画像―大正期―

第4章 地域像と国家像のはざま―昭和戦前期（1）―

第5章 「東奥」の世界―昭和戦前期（2）―

河西英通氏による総説（「青森論」のために）によれば、本書の目的は、近代における青森の自画像の系譜を紐解くことにある。同氏が述べるように、近代以前から続く「西高東低」の歴史認識においては、権力・文化の「中央」からいちばん遠い「後進地域」の代名詞のひとつとして扱われてきた。西南人にしばしば、「野蠻」で停滞的なイメージで語られた青森は、日本が近代化に突き進む時代に、青森県内の地域メディアは、その負のイメージとどう向き合い、どう抗い、どう克服しようとしたの

か。本書では、その活発にして「多様で重層的な」言説空間が蘇る。

各章は、青森県内で発行された新聞・雑誌の記事を、出版媒体ごとにとまとめている。明治初期・後期、大正期、昭和戦前期の四つの年代に分かれており、昭和戦前期のみ、2章（第4～5章）の紙幅を占める。詳細は以下に記述するが、第5章は雑誌「月刊東奥」の記事のみで構成される。

以下、各章の内容及び、それぞれの印象的な論考・テーマについて、個人的な関心に沿って述べたい。

第1章では、近代初期の一八七〇年代から一八九〇年頃まで展開された、激動の明治初期の論考が取り上げられる。長きにわたって支配的な位置を占めてきた制度や価値体系が危機に瀕し、先の見通せない不安感と未来への希望が隣り合って衝突した時代。冒頭を飾る「東奥奨励論」（一八七九）や「白河以北一山百文は却て東奥を振起するもの乎」（一八八九）には、以降「永遠の課題」として付きまどってきた振興論がさっそく浮上することは注目に値する。

第2章は、一八九〇年頃から明治晩年までの青森論を対象とする。日清・日露の両戦争は、明治後期を特徴づける大きなできごとであった。青森論も、その影響を強く受け「本州の最北端」という国内的位置づけに加え、アジアや世界のなかの青森に対する意識が芽生える結果となった。国内経済を支える交通インフラ網の整備に着眼した論考がある一方（章末に掲載される雑誌「北日本」から抜粋した二つの記事はその例である）、アジアを見据えた思想・言説の展開をよく示す例として、青森港を取り上げた日刊紙「東奥日報」に掲載された一連の記事。また、「起

きてよ東北の男子」(一八九六)や「東北男子に望む」(一九〇一)から察すると、経済発展と精神論を混同するような論調もこの時代に台頭してきたように思われる。これは、東北・青森の「後進性」を墮落に還元する世論へ反発し、跳ね返そうとする意志が感じられる。

第3章は、一九一二年から一九二五年までの大正期に発表された青森に関する論考が掲載される。編者によると「近代の息吹が地域に定着した時期」である。目を引くのは、近代的経済発展を全面的に押し出し、東北の可能性を力説する論調。その時代を代表する論説として、浅野源吾の「東北地方の積極的活動時代」(一九二〇)などがある。浅野は東北振興論に強い関心を持ち、初期の東北振興会の設立に尽力し、雑誌「東北日本」の主幹も務めた、経済面での近代化を意識した人物。その「東北日本」に掲載した記事には、「今日東北地方有利の地位を占むる」地域は他にないと主張したのである。

第4章は、昭和戦前期の「地域像と国家像のはざま」にあった時代の青森論を取り上げる。相も変わらず「東北の文化は低いか」(一九三九)や「青森県振興論」(一九三七)のように、近代国家における経済的・文化的な先進・後進論は数多く見られる。一方、三戸新聞に載った「大三戸建設論」(一九三九)から折口信夫による「奥州唄の旅」(一九四二)まで、そして「青森県評論」に掲載された「大東亜戦争と青森県」(一九四四)から「キリスト教が八戸へ来た話」(一九三九)まで、その観点や題材の多様性は顕著で興味深い。

最終の第5章は雑誌「月刊東奥」のいわば特集であり、前章と同じ昭和戦前期を題材としながらも、複数の雑誌を取り上げる他の章と構成を

異にする。また、「躍進青森リンゴの現状と将来」(一九四〇)「リンゴ経済の新体制」(一九四〇)「リンゴと大東亜共栄圏」(一九四一)「航空機燃料となるリンゴ」(一九四五)など、リンゴを冠した記事が多出するものも、他の章と異なる。ただし、この地域的特色を除けば、戦時下において論調が単調になっている、いやならざるを得なかった、ということが目立つ。満州移民や「翼賛青森」を推奨する記事に加え、悪化する銃後の生活環境において、敢えていうなら「県民から健民へ」と、健康づくりを重視している姿勢がある。近代栄養学に基づく食生活改善や結核・トラコーマの撲滅を訴える「迷信を打破し多く産んでよく育てませう」(一九四二)「強い東北民を作れ！」(一九四二)や雑誌の特号「青森健民読本」(一九四二)はこの傾向をよく捉えている。

以上、明治初期から十五年戦争までの青森論の変遷が分かる、魅力的で読み応えのある一冊になっている。また、青森論のみならず、より普遍的な広がり―近代国家における「後進地域」論など―の大きな糧となる、今後の東北研究、地域研究、日本史研究など多数の分野に貢献する力作となっている。

(A4判、七六九頁(図版14P・挿図、地図)青森県、二〇一六年三月刊、本体価格五〇〇円+税)

(ねいすん・ほぶそん 名古屋大学文学研究科特任准教授)